

11. ケーアイ屋上活用の取り組み ～コロナからのリスタート～

介護老人保健施設 ケーアイ

介護支援専門員 西岡修平（にしおか しゅうへい）

共同発表者 大島理絵 森垣俊造 谷川奈美 入里舞子 井上舞 梅田たみ

【はじめに】

当施設には、屋上に花壇がある。これまでは有志の職員が花を植える程度で本格的な活用がなされていなかった。今回施設をあげて屋上の活用に取り組み始めたので報告する。

【方法・経過】

当施設には、運営諮問委員会として地域交流委員会がある。本委員会は、地域貢献活動を実施する場合の企画・運営、その他それに伴う活動の中心を担うことを目的としている。2022 年度は新型コロナウイルス感染症「以下、コロナという」の蔓延により、入所者は面会を制限され、職員は通常業務に加え感染対策徹底を強いられた。地域との交流も自粛することとなり、活発な委員会活動はできなかった。そんな中地域交流委員会メンバーは「屋外で野菜を作ってはどうか」と考えた。花ではなく野菜にしたのは「耕す」「植える」「水をやる」「収穫する」「食べる」という過程で、利用者が楽しんで関われる機会が多いからである。地域交流委員会が野菜作りを始めたことで屋上花壇に注目が集まった。リハビリテーション科も作業療法の一環で花を育て始め、花や野菜作りにボランティアにも関わってもらえるようになった。

【結果】

野菜作りは利用者の笑顔に繋がった。昔に野菜作りをしていた利用者もあり、昔を思い出しながらの作業は回想法としても機能した。収穫した野菜や写真の掲示を通して家族に利用者の様子を伝えることができた。コロナが5類となった後に開催した地域向けイベントで地域住民に農作物をプレゼントでき、また野菜作りの得意な方にボランティアとして関与してもらうこともできるようになった。この活動の裏には地域交流委員会の粘り強い調整、職員への熱心な呼びかけがあり、屋上農園への参加が通常業務に組み込まれるようになってきたのは大きな成果である。そして今、職員間で屋上のレイアウト変更など楽しみながら検討を重ねている。

【考察】

コロナ禍で当施設は、感染予防対策が増えたのみならず、職員に「今は新しい取り組みはできない」というネガティブイメージを浸透させ、いつしかそれが当たり前の状況になっていた。本企画当初は、野菜の世話や屋上への利用者の付き添いなど、業務が増えることへの反発もあった。しかし実際に野菜の収穫で利用者の笑顔を見ることができ、本来のケアのあり方、介護という仕事の楽しさを改めて感じた職員も見受けられ、この野菜づくりの取り組みは当施設がコロナ禍を経て改めて前に進むきっかけになったと言える。この活動を後押ししたポイントの一つは、「有志の活動」ではなく「委員会活動」という業務として確立させたこと、二つ目はネガティブな意見も出てくる中で「楽しい」という気持ちを伝播させ、職員の「やりたい」という想いを役職者が支え、応援したということである。

【おわりに】

この取り組みはまだ始まったばかりであり、今後本格的に屋上のリフォームを行い、利用者や地域住民もくつろげるような素敵な空間を作っていく予定である。